

# 生きものとの関わりと 子どもものの発達

―手のひらの中の命と出会う―

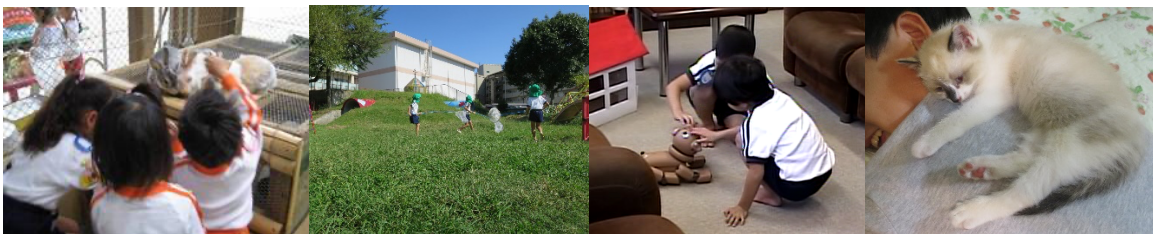
Fujisaki Ayuko  
藤崎 亜由子

奈良教育大学 学校教育講座

# 生きものとの関わりと子どもの発達

－手のひらの中の命と出会う－

奈良教育大学 学校教育講座 藤崎 亜由子



## 1. はじめに

みなさんは生きものと聞くと真っ先に何を思い浮かべるでしょうか？動物園のゾウやキリンなどが頭に浮かぶ人もいれば、イヌやネコなどの身近なペット動物を思い出す人もいるでしょう。また、最近ではめっきり生きものと触れ合う機会が少なくなったと感じる人も少なくはないでしょう。

私の専門は発達心理学と保育で、私たち人間が生きものをどのように理解し関わっているのか、生きものとの関わりから何を学んでいるのかを研究しています。生きものには植物や菌なども含まれますが、中でも動物、特にペット動物や学校飼育動物、そして虫との関わりを通して生きものと人間の関わりについて考えてきました。以下では、動物たちの「心」を理解する人間の心に注目した研究を紹介した後、学校飼育動物の代表であるウサギと子どもたちの関わり、そして虫との関わりについての研究をご紹介します。

## 2. 動物に「心」はあるの？

人間以外の動物に「心」はあるのでしょうか？ ペット動物の飼い主た

ちは、ネコやイヌが喜んだり、悲しんだり、時には恥ずかしがったり嫉妬したりという豊かな心的生活を送っていることをまず疑わないでしょう。でもサカナや虫となるとどうでしょうか。イヌ・ネコほどは感情を読み取りにくいかもしれませんね。

動物の「心」を理解する人間の心を扱う分野として素朴理論の研究をあげることができます。ウェルマンとゲルマン (Wellman & Gelman, 1992)によると、人間は素朴物理学、素朴心理学、素朴生物学という3つの核となる領域について、理論とよべるような知識体系をもっているといえます。素朴物理学とはモノの運動に関わる理解であり、素朴心理学は人間の行動理解のための知識体系です。そして、素朴生物学とは人間を含む生物の主に身体維持機能（食べることや、呼吸をすること、成長、排泄など）の理解に関わるものです。子どもたちは学校教育などで体系的に教わる以前に、自ら各領域の知識を学び体系的に蓄積していきます。素朴生物学研究の第一人者である稲垣・波多野 (2005) は、5～6歳という時期にはすでに、子どもたちは未熟ながら動物と植物を含む生物という統合された概念をもっていると述べています。

素朴心理学の中でも心的帰属 (mental attribution) に関する研究領域では、人間が人間以外の事物に対してどのように「心 (意図や欲求、感情)」を帰属させるのかについて調べています。この分野の古典的な研究としては、ハイダーとジンメル (Heider & Simmel, 1944)が有名です。彼らは、三角形や円の幾何学図形が動き回る映像を見た参加者が「ためらった」「気持ちを伝えようとした」というような心理的なストーリーを報告することを示しています。人は、画面上に示された幾何学図形であっても、それが目標に向かって進むような動きをしたり (目標指向性)、自力で動くとき (自己推進性) には、意図をもつものとして解釈する傾向があるようです (Premack & Premack, 1997)。また、近年ではロボット技術の発達とともに、子どもたちが自動的に動く機械 (ロボット) にどのように意図や目標を帰属させるのかについても研究が行われるようになってきました。板倉 (2007) は、ロボットが視線を人間に向けるなどのコミュニケーション的な動きをした場合、2～3歳の子どもたちは、ロボットの行

為に意図を読みとったといいます。このように人間は人間以外の対象に「心」を見出す力を発達の早期から発揮し始めるといえるでしょう。

### 3. 動物の心を理解し始める子どもたち



#### 事例1：ネコと出会った1歳の女の子S

お正月に祖母の家に行ったときに、S（1歳1ヶ月）はネコと会いました。興味津々で、自分と同じような大きさを目の前を横切る生きものに目を丸くして、触ろうとよちよち近寄ります。ネコが立ち止まり目が合うと、手を伸ばし、手のひらをにぎにぎとしながら、「にゃー」（周りの大人が、「にゃーがいるね」と声をかけていたので、にゃーと言ったようです）と呼びかけます。ネコのほうは、新しく出会う生きものに警戒しつつ、すっとよけるのでなかなか触らせてはもらえません。

しばらくして、Sはネコが布団で寝ているところを発見し近寄ります。すぐには触らずに「にゃー」といいながら、Sは地面に手を付けて、ネコの顔を覗きこみます。それからおもむろに手を伸ばして背中あたりをそっと触ります。ネコは少し警戒し、顔をあげ前脚を立てて威嚇のポーズをとります。すると、Sもすっと警戒して手をひっこめます。また触ろうと手を出すと、今度は軽くネコパンチをされて手をひっこめます。何回か繰り返しているとネコが起き上がり座り直し、じっとSを見据えました。Sはその目力にすごすごと後ずさりして、それ以上手を出しませんでした。

Sはネコがどういう動物かもわかりません。でも、ネコの「もう触るなよ」というジェスチャーがSには伝わったようです。また、Sの行動には、明らかに人間の子どもや大人に対するのとは異なる要素が含まれています。にゃーと言いつつ手を振る行動は人間に対する振る舞いではみられないものでした。S（1歳1ヶ月）は、人間とは異なるものの意図的な活動主体としてネコを認識し関わろうとしていたのかもしれませんが。

麻生（2007）は、人間の子どもは、顔をもち意図的な動きをする対象を「意図をもつ生きもの」という大きな枠組みでまずは理解し、そこから

少なくとも1歳3ヶ月ごろまでには「人間学（素朴心理学）」と「生き物学（素朴生物学）」とが分化し始めるのではないかと議論しています。5～6歳にもなると、子どもたちは表象的な心という概念を獲得し、人間の行動をその背景にある心という観点から理解するようになります（これを心の理論の獲得といいます。急いで駅に向かって走っている人を見ると、遅刻しそうで焦っているのかな？と、その行動を心の側面から理解しようとするよね）。さらに、生物は生まれ、食べ、呼吸をし、成長するというような特徴をもつものとして、素朴ながら生物特有の理論を体系的に理解し始めます。このように、人間の心に対する理解、そして生物に関する理解を急激に深めていく幼児期に、子どもたちは「動物の心」というものを、どのように理解していくのでしょうか。

都市化された生活の中では、子どもたちが初めて身近に接するのが幼稚園や保育所の動物であることも少なくありません。そこで3～6歳の子どもたちを対象に、ウサギ・カメ・キングョという日常的に関わっている園の動物の「心」をどのように考えているのかインタビュー調査を行いました（藤崎, 2005）。その結果、年齢があがるとともに生物学的な知識が増え、過度な擬人的認識（動物が絵本を読みたいと思ったり、テレビの主人公をカッコいいと思ったりする）は減少していきました（年少児3～8割、年長児2～4割）。その一方で、餌をあげると喜んだり、仲間に噛まれると怒るといった子どもたちは増えていきました（年長児では8～9割）。ぱくっと餌をくわえるカメの行動や、仲間を追いかけ回すウサギの行動の背景に「心」が存在することを、子どもたちは確信していくといえるでしょう（本当に「心」があるかは別として）。さらに6歳児では、ウサギは怒るがカメやキングョは怒らないというように、動物の種類による区別がみられ始めていました。これらの結果は、就学前の子どもたちもウサギらしさ・カメらしさ・キングョらしさに応じた「心」の理解の仕方を学んでいくことを示しています。

では、動物の「心」に対する認識だけでなく、動物への関わり方も加齢とともに変化するのでしょうか。幼稚園でおこわなれているウサギの飼育活動を観察した結果（藤崎, 2004）、年少児は逃げるウサギを追いかけ

たり餌を投げたりという動くモノに対する素朴な反応が多い一方で、年長児になると慎重に近寄るなどウサギの習性に合わせて接するようになりました。さらに興味深いことに、年長の子どもたちのほうが年少の子に比べて、「こっちの方が柔らかいから、よく噛んで食べるんだよー」「1人で1つ食べたらかんやん。みんなで食べるんやから」などと、ウサギに対してまるで人間に対するかのように語りかけることが多かったのです。

実は、この行動はこれまで行われてきた調査とは矛盾する結果です。「動物のことば」に対する幼児の認識を調べた研究の結果（藤崎, 2011）では、ウサギと自分とが話せるかを問われて「はい」と回答したのは年少児（3歳）では35%、年長児（5歳）ではわずか12%でした。つまり年長の子どもたちは、ウサギと自分とはおしゃべりできないと頭ではわかっているにも関わらず、実際のやりとりの中では頻繁にウサギに対して話しかけていたのです。

以上の結果から、年長児でみられるような擬人化は、生物学的な知識が乏しく人間との類推に頼らざるをえない幼い子どもたちの擬人化（人間はお風呂に入るのが好きだから、ウサギもお風呂が好きだろうなど）（稲垣・波多野, 2005）とは区別する必要があると考えられます。年長の子どもたちはウサギと人間とを混同しているのではなく、ウサギについて無知でもありません。どうやら、適切な生物学的な知識を獲得しつつも、それと両立できる「感情移入的な擬人化」があると考えたほうが納得できます。大人でも人形（物体）や風にそよぐ木々（植物）にも「心」が宿っているように感じる瞬間があります。ウサギに言葉が通じると本気で思っていなくてもつい話しかけてしまう、本当かどうかは確かではないけれども、動物たちも考え事をしたり夢を見たりという豊かな心的生活をしているかもしれないと考えてしまう。このような曖昧で揺れ動く境界的な人間の認識を解明していくことは、人間という動物のおもしろさを理解することにつながっていくのです。

上述した「動物のことば」に対する認識を調べた調査（藤崎, 2011）では、ウサギと自分とは話せないとの認識をもつ子が加齢とともに増えていきました。では、ウサギとウサギではどうでしょうか？ 年少の子どもた

ちは、自分とウサギが話せないと同時に、ウサギとウサギも話しができないと考える子どもたちが約半数（45%）存在していました。一方で、年長児になると、自分とウサギでは話ができないが、ウサギとウサギは話ができると考える子が多数を占めました（76%）。この結果は、人間と共通する点をもちつつも異なる論理で生きる動物たちの多様な世界を思い描く力の育ちを感じさせます。もしかしたら自分にはわからない方法で動物たちは会話をしているのかもしれない。もしかしたら、動物たちも何かを感じ、何かを考え、夢を見たり、思い出に耽ったりしているのかもしれない。人間には人間の言葉があるように、動物には動物の「ことば」があるかもしれないという認識が発達してくるのです。

上述の年長児が示したような感情移入的な擬人化は、人間中心的な一元的な世界観から、多様な動物が織りなす多重の世界という新たな世界観を獲得する過程として捉え直すとおもしろいかもしれません。地球規模での持続可能な社会を目指す現代においては、国境を越え、世代を超え、種を超えて、他者の視点で世界をみる必要があります。身近な生きものたちの視点から地球の今や未来を考える力をどのように育めるのかは今後の大きな研究テーマです。



#### 4.虫、身近にいる異質な他者との出会い

以上でみてきたペット動物や学校飼育動物は、ある意味、人間とともに暮らす人間文化の内側にいる存在です。一方で、虫（昆虫をはじめとしたクモやダンゴムシ、カタツムリ、カエルなどの小動物の総称）は好き嫌いに関わらず都市化された社会でも避けて通ることのできない「野生」の生きものです。虫は人間が肉眼で眼にすることのできる最小の生命であり、ライフサイクルが短いが故に生と死を間近に見せてくれる貴重な存在です。時には、「命を大切に」と言いつつ、保育者も蚊やアリの叩きつぶすこともあり、慈しむ対象としてのペット動物とは異なる生きものとの付き合い方を教えてくれます。

何より虫は子どもたちにとって格好の遊び相手です。自然教育というと、キャンプに出掛けたり、山や海に行ったりという特別な教育が必要だ

と考える人もいます。もちろんそれは非日常の貴重な体験ですが、幼児期には特に日々の生活の中で、子どもたちが主体的に自由に関われる身近な自然が大切です。その恰好の場が幼稚園や保育所などの園庭であり、そこに生息している虫たちなのです。ある園の園庭で私が見つけただけでも300種を超える虫がみつかりました（Web図鑑「奈良女子大学附属幼稚園 園庭のむしあそび図鑑」を覗いてみてください）。毎日子どもたちは嬉々としてダンゴムシを集め、トンボを追いかけ、イモムシを捕まえています。まさに、虫は手のひらの中の小さな野生であり、いじって遊べる命なのです。

3～6歳の幼児に園庭に生息している15種類の虫（アゲハチョウやクロヤマアリ、ハラビロカマキリなど）についての知識や好き嫌いを尋ねたところ、【虫苦手群】【虫嫌悪群】【虫好き群】【虫知識豊富群】【無知・虫嫌悪感低群】の5グループに分かれました（藤崎・麻生，2022）。特に年長の女兒では【虫苦手群】や【虫嫌悪群】が増えていました。幼児期にすでに虫への嫌悪感が生まれるのであれば、就学前からの教育が大切になります。必ずしも皆が【虫好き群】のように虫を好きになる必要はありませんが、【虫嫌悪群】のように虫を避け始めると自然全般への関わりが希薄になってしまいます。それを防ぐためにも、まだ虫への嫌悪感が低い年少児の時期から、丁寧に虫を含めた自然との関わり・接点を育んでいくことが重要でしょう。

また、【虫苦手群】はチョウやテントウムシなど、カラフルで絵本などのモチーフとなっているような一部の虫は好みますが、それ以外はあまり知らないのが特徴です。さらに、カマキリやバッタなども害を及ぼしそうという理由で嫌う特徴があります。園庭に生息する危険な虫について必要最低限の情報を伝えることで、無用な危機感を減らし、虫への嫌悪を増大させていくことを防げるでしょう。そのためには、保育者の適切な関わりが求められるのです。だからこそ、保育者自身の虫への苦手意識を緩和することは、とても大切な課題だと考えています。そして、【虫好き群】の子どもたちとも一緒になって生きものの世界を探究していけるような虫好き、生きもの好きな保育者が増えてほしいと思います。



最後になりますが、子どもたちの生きものに対する興味関心を大切に育み、生きものに馴染み親しみ、彼らが身近に存在していることを当たり前として受け入れる土壌を幼児期に十分育んでいきたいと願っています。それが、自分たちの生活が多少不自由になっても、時には刺されたりする害があっても、他の生物を排除せず共存する道を模索する気持ちへとつながっていくのではないかと思います。みなさんも小さな園庭で広がる小さな生きものたちの世界から、地球の未来について考えてみませんか。

### <引用文献>

- 麻生 武 (2007)『心理学の世界 教養編 3. 発達と教育の心理学：子どもは「ひと」の原点』 培風館.
- 藤崎亜由子 (2004) 幼児におけるウサギの飼育経験とその心的機能の理解. 発達心理学研究, 15(1), 40-51.
- 藤崎亜由子 (2005) 幼児は動物の「心」をどう理解するか：ウサギ・カメ・キングヨの比較から ヒトと動物の関係学会誌, 15, 66-73.
- 藤崎亜由子 (2011) 動物の「ことば」に対する幼児の理解の発達. 発達・療育研究 (京都国際社会福祉センター), 127, 3-17.
- 藤崎亜由子・麻生 武 (2022) 園庭に生息する15種の虫に対する幼児の理解の発達. 保育学研究, 60(1), 91-102.
- Heider, F., & Simmel, M. (1944) An experimental study of apparent behavior. *American Journal of Psychology*, 57, 243-259.
- 稲垣佳世子・波多野誼余夫 (2005)『子どもの概念発達と変化：素朴生物学をめぐって』 共立出版株式会社.
- 板倉昭二 (2007)『心の宇宙：心を発見する心の発達』 京都大学学術出版会
- Premack, D., & Premack, A.J. (1997) Infants attribute value  $\pm$  to the goal-directed actions of self-propelled objects. *Journal of cognitive neuroscience*, 9, 848-856.
- Wellman, H. M., & Gelman, S.A. (1992) Cognitive development: foundational theories of core domains. *Annual Review of Psychology*, 43, 337-375.

## 藤崎 亜由子 (Ayuko FUJISAKI)

---

2003年 奈良女子大学大学院 人間文化研究科  
複合領域科学専攻博士後期課程修了 博士（学術）  
2010年 大阪成蹊短期大学 准教授  
2016年 大阪成蹊大学 准教授  
2018年 兵庫教育大学 准教授  
2022年 奈良教育大学 准教授



【研究テーマ】 発達心理学の観点から「ヒトと動物との関係」に関心をもって研究を行ってきました。現在は、特に虫という身近にうごめく「野生」との付き合いの中で、子どもたちがいかにして生命観や自然観を育むかに関心を寄せて、保育者の方々と一緒に研究をしています。

【趣味】 小さい頃から生きものを飼育するのが好きで、今は拾ったネコと川で捕った魚を育てています。海外のドラマや映画を観るのも好きです。

【休日の過ごし方】 川でガサガサするのが好きです。博物館や美術館、水族館や動物園に行くのも楽しみの1つです。

---

## 生きものとの関わりと子どもの発達 －手のひらの中の命と出会う－

---

著者 ふじさき あゆこ  
藤崎 亜由子

2023年 3月31日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9343 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <https://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>